

コンクリート工学年次大会 2003（京都）の概況

実行委員会委員長 西 林 新 蔵

JCI2003 京都大会は「はんなり コンクリート」と銘打って7月16日から18日までの3日間、我が国で初めての本格的な国際会議場であり、多くの重要な国際会議が開催されてきた京都国際会議場（KICHC）、同イベントホールで開催された。京都大会は、1984年の大阪、1993年の神戸に続いて近畿地区で開催される3回目の大会にあたり、3日間で全体入場者数13,900余名を数えた。

本大会は、研究発表と活発な討議の場および最新・最先端技術を紹介するプラザを提供するむねをJCI ホームページに掲載し、大会への参加を勧奨したところ、年次大会最多の研究発表と、昨年以上のテクノプラザへの参加を得た。

開会式では、実行委員長の本大会参加者に対する歓迎と開会宣言に引き続き、森田司郎会長の挨拶と友澤史紀副会長のJCI活動報告があった後、コンクリートテクノプラザの会場入り口で、松井繁之部会長と実行委員長の挨拶、案内板の除幕式などの一連のオープニングセレモニーが行われた。

本大会の主行事である「第25回コンクリート工学年次講演会」は10会場で3日間にわたって開催され、過去最高の641編の講演と活発な討論が行われた。また、13編の委員会報告は、イベントホールの特設会場でポスターセッションの形式で行われた。

「コンクリートテクノプラザ2003」には76社、94小間の参加があり、最新・最先端の技術が展示され、3日間で延べ8,246名の入場者が、またこれと並行して2会場で催された技術紹介セッションには3日間で51社の技術紹介と約1,880名の参加者があった。

「第10回生コンセミナー」は「性能規定型コンクリートの将来像－これからの歴史をつくる生コンクリート－」をテーマに初日の午後に開催され、国際会議場メインホールが約500名の参加者でほぼ満席となる盛り上がりのなかでパネルディスカッションが行われ、活発な意見の交換が交わされた。

「見学会」は3コースを準備したが、ほぼ定員一杯の参加者を得た。

大会3日目に催された「特別講演会」にはProf. Alfred Haack博士（STUVA, Cologne, Germany）を招聘、「ヨーロッパのコンクリート事情とトンネル火災」と題する講演に、多くの聴衆の参加を見た。

本大会では、「懇親会」は最終日に行った。これは、ともすれば最終日の発表と討議が等閑になりがちな傾向を打破するためと、「年次論文奨励賞」を授与された若手研究者を参加者全員で称えるとともに、最後の行事である閉会式と次期大会への引継ぎを懇親会の中で行うことにしたためである。

「閉会式」では実行委員長の挨拶と榊田佳寛論文査読委員会委員長による論文の講評があり、引き続き年次論文奨励賞授与者が渡辺史夫講演部会長から紹介され、実行委員長から受賞者の代表に賞状と記念品が授与された。「次期大会への引継ぎ式」では、会長から中田慎介次期大会実行委員長に委嘱状が手交され、中田委員長の次期大会への招待の挨拶があった。最後に「はんなりコーラス隊」のコーラスにあわせて「琵琶湖就航の歌」を参加者全員と合唱しながら大会の幕が下ろされた。

本大会は、その期間中梅雨末期の、おおむね曇天で比較的涼しい天候のなかで、ほとんどトラブルもなく所期の目的を達成して終了することができました。これもひとえに講演者と討論に参加された方々、テクノプラザへの出展者、生セミナーへの参加者をはじめ、大会の諸行事にご協力を頂いた皆様方のお蔭であります。また、*fib* に引き続き本大会を開催できましたことは、その企画と実行がわずか 9 ヶ月の短期間であったにもかかわらず、実行委員会各位、各分科会各位の献身的なご協力の賜物であり、ここにこれを付記して、関係各位に心からの感謝の意を表し本大会の概況報告とします。